

宮城県森林組合連合会第五代会長
社団法人宮城県民の山造成会初代会長

高橋 友衛

貫いた治山治水の信念
足跡にひこばえ萌える

【たかはし ともえい】

1885(明治18)年 10月18日、大口村
(現大崎市)に生まれる
1949(昭和24)年 宮城県森林組合連合会第五代会長
1953(昭和28)年 社団法人宮城県民の山造成会初代会長
1970(昭和45)年 4月29日死去

一人米一升の抛金で造林を

進駐軍払下げの幌付きジープが一台、土ぼこりを上げて街道を走ってゆく。目指すのは県内市町村の公民館や集会所だ。

夕暮れどき「文楽と映画の夕べ」の告知が張り出された会場に、一日の仕事を終えた人々が集まってくる。鳴子町中山平の住人による文楽と借りてきたフィルムの上映会に合わせ「宮城県民の山造成会」（以下造成会）への加入呼びかけが行なわれるのだ。

「水害から田畑を守るには造林による治山治水を進めなければなりません」
造成会の発案者、高橋友衛が熱弁をふるう。

「県民一人当たり米一升の抛金で県民の山を造成しましょう。あなたもお金を出すことで山持ちになります。ぜひ加入をお願いします」

繰り返し訴える高橋の姿に聴衆が惹き込まれていく。集会場に熱気がこもる。参加者に、造成会の強烈な印象を植え付けて会は文楽と映画の上映に移る。集会を終えて後片付けをし、宿に帰るのは早くて深夜一時、遅いときは零時を回ることもあった。

昼夜を分かたず続く巡行。冬は寒さに耐え夏は汗が流れるままジープで移動する。六〇代後半の高橋友衛にとってそれは決して楽な仕事ではなかったはずだが、造林運動の歩みを途中で止めることはなかった。

北上川の氾濫の原因は山にある

高橋友衛は一八八五（明治一八）年一〇月一八日、大口村（現大崎市鳴子町）に生まれた。生家は東鳴子温泉の老舗の温泉旅館で広大な森林を保有する資産家だった。

私塾の仙台数学院（現東北高校）に学んだ後、家業である旅館と建設・製材の会社を継いだ。

明治期の大口地区は湯治客が往来する鄙びた山村で、冬は雪に埋もれ長い越冬生活を強いられた。大正初期に開業した陸羽線が川渡、鳴子へと延伸されると人や物資の行き来も活発になったが、深い森と湯煙のたたずまいに変わりはなかった。

故郷で高橋は熱心に家業に打ち込む。誠実な人柄はやがて村民の信頼と支持を集め、一九二二（大正一一）年、川渡村の村議会議員に推されて当選。五期二二年を務めたのち玉造郡選出の宮城県議会議員となり、名を揚げた。

そんなとき宮城県をキャサリン台風が襲う。

一九四七（昭和二二）年九月、六日頃から断続的に降り続いた雨は次第に暴風雨へと発達し、北上川の水嵩を増やしていった。一五日には鬼首の荒雄川大橋が流出。鳴子温泉では地盤の緩みで山崩れが起き、一六日にはついに北上川の大泉堤防が決壊して、広い範囲が浸水した。警戒にあたっていた佐沼警察署の警察官一名が洪水の犠牲になり、登米町（現登米市）では耕地・人家が一〇日間水に浸かった。田畑も水没し、

農民を打ちのめした。

高橋は県議一年目にして自然災害の試練と向き合うことになった。

当時北方村（現登米市迫町）の村長だった袋光雄（のちの宮城県農協中央会長）が村内の被害状況を視察して庁舎に戻ってきたところ、高橋が訪れて、治山治水の必要性を熱く説き始めた。

「村長さんも良く分かっているでしょう。水害の原因は、戦争で山の木が乱伐されたことにある。このまま放置しては、いつまで経っても日本は再建できない。いまこそ本気になって造林を行なわなくてはいけないのです」

被害の大きさを目の当たりにしてきたばかりの袋は、「北上川の氾濫を抑えるために上流の造林を」と訴える高橋の信念に共感し、協力を約束する。

県民の山造成運動へと進路を取る

戦時中、軍事物資などの木材需要を満たすため森林の伐採が進んだ。さらに戦後は復興のために大量の木材が必要となり、次々と山から木が伐り出された。山は荒廃し、治水機能はぜい弱になる一方だった。

高橋の脳裏には、明治時代、暴れ天竜の異名を持つ天竜川を植林で治水した金原明善の運動があった。金原は天竜川の氾濫を治めるためには流域に健全な森林がなけれ

ばならないと考え植林事業を進めた静岡の人だった。金原の取り組みに感銘を受けていた高橋は、天竜川の試みを心の拠り所とし、さらに治山治水の信念を強くした。

高橋の子息、高橋祐幸は『県民の山30年の歩み』のなかで、「水害を防ぐためには何とかしなければと考え、進駐軍などにも接触してみても、造林運動を進める必要があると話したのです」と当時の状況を語っている。父子の会話を契機に造林運動は「県民の山造成運動」へと明確な像を結ぶ。

昭和二四年、高橋は宮城県森林組合連合会（以下県森連）の第五代会長に就任。会長の職を務めるかたわら、いや會長職に就いたからこそ使命はより重要性を帯びたであろう。高橋は、造成会設立に東奔西走の日々を送ることになる。

当時発行されていた林材新聞東北支社長の鈴木亀造は、高橋の姿を「この運動に関する限り異常とも思える熱心さで、街角でも、汽車の中でも誰れ彼れかまわず山の現状を語り、造林の必要性を説き、将来の資産増について語る姿がいまでも鮮明な記憶として残っており」と記している。

ちようど「荒れた国土に緑の晴れ着を」をスローガンに第一回全国植樹祭（昭和二五年）が山梨県で開催され、植林への関心が高揚していた時期でもあった。

第三者による造林を認めた「造林臨時措置法」や「緑の羽根募金」、人づくり・村づくりを掲げる「学校植林運動」など次々と繰り出される林業政策に、高橋は我が意を得たりの思いだったのではないだろうか。

「協同」で植林し、川を治めていく事業

運動は、「植林よりも山林開発をすべき」といった意見や一度予算化された基金が町長改選で覆るなどの抵抗に遭いながらも、短期間のうちに賛同者を増やしていった。

造成会第三代会長の勝井昌徳はその理由に、高橋の人柄と林業経営の手腕、「高友（高橋友衛）式間伐法」への高い評価を挙げている。

高橋は、樹高が高くても枝張りの不均衡な木は伐倒し、樹高が低くても枝葉量の多い木は残すという高友式間伐手法を編み出し、県下に普及させた、いわば林業のパイオニアだった。若手の林業家たちは高友式間伐法を習得するため、こぞって高友参りをしたという。「そこに県民の山という話がでてきた。私の父親は高友さんの行なうことに間違いはないからと言っていた。他の人もそう考えて信頼したのでしょう」。勝井はそう述べている。

昭和二八年五月二〇日、社団法人宮城県民の山造成会が設立され、高橋はその初代会長に就く。

会員は一口一〇〇円の基金を拠出するのだが、当時米一升の値段が約一〇〇円だった。そこで「県民一人当たり米一升の拠金で県民の山を造成しましょう」と呼びかけ、高橋も運営資金として一〇〇万円の私財を寄附した。

県民が基金を拠出して会員となり造林事業を実施する団体は珍しく、勝井は「狙い

は、林業に関係ない人たちにも山に関心を持ってもらおうと同時に、その森林の公益的な面、すなわち自然環境とか災害のときの役割といったものについて理解していただくための構想だったのですね」と述懐している。

会員になったとしても山林を私有できるわけではない。県民の山造成運動は、まさに「協同」で源流の山に木を植え、緑を増やし、氾濫する川を治めていこうとする事業だった。

五四〇ヘクタールの山に緑がよみがえる

造成会は、発足と同時に加入申し込みが始まり、昭和二八年度末には会員数二〇五人、基金額約三〇〇万円と幸先の良いスタートを切る。

造林地を求めて契約を交わし、一〇月一七日には川渡村大口の湯沼開拓農協が所有する山地で第一回の植樹式を開催した。

しかし昭和三〇年代の林業界は、燃料需要の変化で里山林がそれまでのように薪炭用林として利用されなくなるなど、転換期に差し掛かっていた。

基金が思うように集まらなくなった造成会は、結局当初計画していた二〇〇〇ヘクタールの造林費用を基金のみで賄うことはできないと判断。五四〇ヘクタールまで造林を進めたところで第一期事業を終了した。

高橋にとっては苦渋の決断だったろう。だが戦争で荒廃していた山林が県民の浄財によって再び緑の山に変わるといふ事実は、人々を大いに勇気づけたはずだ。

一方、高橋は県森連会長としても多忙な日々を送っていた。

昭和二六年、森林法の成立で県森連は協同組合として傘下に一一一組合を数える組織に生まれ変わる。

この森林組合を、真に協同組合の理念に立脚し、社会経済の変動や地域の情勢にも対応できるように体制を整えること。それが県森連の喫緊の課題となった。

高橋は陣頭に立って第一次・第二次の森林組合振興対策を策定し、各森林組合の経営基盤の改善に努めた。また県が管理する種苗圃場を借地して、戦争で一時中断していた苗畑経営を再開したのもこの時期である。

まさに縦横無尽の活躍だっただけに、健康には人一倍気をつけていたようだ。「あるとき下部を固定した自転車があったので、何をするのか聞いたところ、足腰が弱ってくるからこれで自転車乗りをし、足腰を強くするのだと申しておられました」。造成運動に奔走する高橋をジープでの移動や募金活動で支えた県森連の佐藤正三は、懐古談のなかでそうふり返っている。

一途に貫いた治山治水の信念

高橋は部下や後輩たちから敬愛を込めて「高橋翁」と呼ばれていた。「熱血漢、熱心な人」が周囲の共通した人物評である。

こんなことがあった。造成会の佐藤久弥理事が、仲間とともに高友旅館に宿泊したときのこと。宴会を始めようとした矢先、高橋が高友式間伐法の講義を始めた。唾を飛ばしながらの熱演に佐藤たちは言う言うの体で引き上げ、風呂に向かう。だが高橋は風呂まで付いてきて入浴中もずっと間伐法の講義を続ける。ようやく床についたと思ったらそこにも掛け布団を持参した高橋が来て一晩中びっしりと講義を聞かされたという。

また人情家の一面も持ち合わせていた。造成会設立のため開催していた「文楽と映画の夕べ」。演目は毎回同じなので、上演する方は台詞も頭に入り、感激も薄れる。しかし高橋は、お家騒動に母子の別れをからませた悲劇『傾城阿波鳴門』が上演されるたびに毎回涙を流していたという。人情の機微に通じていたからこそ、私心のない行為に身を賭すこともできたのだろう。

高橋は県民の山造成運動を始めるにあたって次のように趣意書をしたためている。

「私が提唱する『県民の山』造成は本県より水害を除くため、県民の熱情と赤誠の結集をもって荒廃せる山を緑化し、水害の抑って来たるべき根本を治め、その森林資

源の増殖を図り、等しく山林の恩恵に浴し、造成せられし森林は本運動に賛同せられし人々によって永く管理経営致し、水害を除きつつ森林資源の増殖を期す民主安定への建設運動であります」

一途に治山治水の信念を貫いた高橋友衛。

「山は祖父が植えて孫が利を得る」の習い通り、翁の歩いた跡には孫生えが萌えて故郷の山を潤し、川をなだめたのであった。